

跡見学園女子大学の桜



新座キャンパス 構内サクラガイド

桜の園、跡見へようこそ。

サクラは跡見学園女子大学のシンボルであり、構内全域にわたって多くの種類が植栽されています。これらのサクラは、開学当初の1965年（昭和40年）に高山雄三郎氏が京都の佐野藤右衛門氏の桜苗園から取り寄せ、寄贈して下さったことに始まります。

現在あるサクラの大半は、大学と歩みを共にして来たものです。さらに、1980年に第13回卒業生からソメイヨシノが寄贈され、1991年には財団法人日本花の会からソメイヨシノとイチヨウが導入されるなど追加植栽されています。

構内にあるサクラは2016年3月の時点で189本です。野生種はヤマザクラ、エドヒガンなど6種類、栽培品種は37種類あり、さらに未同定のもが2種類あります。本学のサクラの特徴はヤマザクラが最も多いことで、50mにも及ぶ並木道はほかに例が少なく、ソメイヨシノの華やかさとは違う楚々とした野趣に満ちた美しさで愉ませてくれます。栽培品種はイチヨウとカンザンが多く、ベニナンデンやコウダイジなどの珍しい品種も植えられています。早春から晩春に至る長い期間色とりどりのサクラを見ることができ、景観のみならず、教育と研究にも役立っています。

日本人に最も親しまれているサクラの多様な美しさをお楽しみください。



野趣あふれる原種のサクラ

野生種のサクラは一括して「山桜」と呼ばれてしまうことが多いのですが、日本国内には大きく分けて約10種のサクラが自生しています。このうち、本学構内では下に紹介する6種（ヤマザクラ、オオヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガン、ヤブザクラ、カラミザクラ）をみることができます。特に日本古来のサクラの代表で古典文学にも「花」として数多く登場するヤマザクラは個体数が多く圧巻です。これらの野生種は栽培品種のような派手さはありませんが、楚々とした野趣のある美しさをたたえています。有史以来、日本人に愛されてきた野生のサクラならではの気品ある花をお楽しみください。



ヤマザクラ（山桜）
Prunus jamasakura

跡見No.／1~5, 11, 14, 15, 20~22, 25, 27, 28, 33~35, 40, 48, 50, 54~60, 62~64, 79, 143

古来の花見の桜

古典文学中の「桜」の大半は本種で、ソメイヨシノ登場以前は最も日本人に親しまれたサクラでした。名所で名高い吉野山のサクラもほとんどがヤマザクラで、本学でも個体数が多いのも本種です。白い花と同時に開く紅茶色の若葉の対比は雅やかで王朝絵巻を彷彿とさせます。葉裏は白色を帯び、縁の鋸歯は低く内側に曲がります。東北以南の本州、四国、九州に分布します。



エドヒガン（江戸彼岸）
Prunus spachiana

跡見No.／8, 10, 12, 16, 18, 101, 124, 129

千年を生きる桜

野生種の中では、本学ではヤマザクラに次いで個体数が多いサクラです。長命なサクラとして有名で、「根尾の淡墨桜」や「山高神代桜」など、サクラの巨木の大半は本種です。花はやや小型で色には変異があり、葉が開く前に開花します。萼筒が膨らんで壺形となり毛が多いこと、葉の裏面は細かい毛が生え側脈が多いのが特徴です。本州、四国、九州に分布します。



オオシマザクラ（大島桜）
Prunus speciosa

跡見No.／52, 149, 150, 157

桜餅の葉はこの桜

花は白色で野生種の中では大きめで、緑色の葉が花と同時に展開する野生味の強いサクラです。接ぎ木用の台木として重宝され塩漬の葉は桜餅の材料とされます。またサトザクラができる過程でも重要な役割を果たしました。成葉は無毛で厚く、縁の鋸歯の先端が糸状に伸びるのが特徴です。花に良い香りがある個体もあります。伊豆諸島、伊豆半島、房総半島に分布します。



オオヤマザクラ（大山桜）
Prunus sargentii

跡見No.／151~154, 156

北国の春を彩る桜

花は色が濃いため美しく「ベニヤマザクラ」という別名もあります。観賞用に栽培されるほか、美しい皮目のある樹皮は東北地方の工芸品「樺細工」に欠かせません。若葉は紅茶色で粘り、成葉の鋸歯は粗く三角形であるのが特徴です。日本では北海道~九州に分布しますが、分布の中心は高冷地や北地などの冷涼な地域です。本学ではスクールバス停脇に植えられています。



ヤブザクラ（藪桜）
Prunus hisauchiana

跡見No.／139

関東の丘に春を告げる桜

関東地方西南部の丘陵地に特産し、マメザクラとエドヒガンの間に生じた交雑品がクローン繁殖で広がったと推定される興味深いサクラです。花の萼筒は太く短かく基部が膨らみ、萼片の縁に明瞭な鋸歯があること、葉縁に重鋸歯があるのが特徴です。発見当初、天皇陛下に因んだ学名が提唱されましたが、余りにも高雅なるために発表が見送られたというエピソードがあります。



カラミザクラ（唐実桜）
Prunus pseudocerasus

跡見No.／185

本来の「桜桃」

江戸時代に渡来した中国原産の野生種で、シナミザクラとも呼ばれます。本来の「桜桃」は本種のことで、果実は小振りながらも甘酸っぱく食用になります。この果実のつややかな美しさは、古来中国では美しい唇に例えられてきました。花はソメイヨシノよりも早く寒さの残るうちに咲き、長い雄しべが特徴的です。幹の下部から空中に根が出るのも本種の特徴です。



ヤマザクラやエドヒガンの影響を強く受けたサクラ

本学構内における代表的な原種はヤマザクラ、エドヒガンですが、構内にはこれらの影響を強く受けた栽培品種も植えられています。ヤマザクラの影響を強く受けた‘サノザクラ’や‘ヒヨシザクラ’は、近くで見ると一つ一つの花が八重咲きなので原種の子ザクラとは違った印象を受けますが、白みの強い花と、同時に開く紅色を帯びた若葉とのコントラストの美しさは原種と共通しています。また、現代のサクラの主役である‘ソメイヨシノ’や、優美な風情で知られる‘イトザクラ’、‘ヤエベニシダレ’がもつ、葉に先駆けて花が咲くという特徴はエドヒガンから受け継がれたものです。



ソメイヨシノ ‘ソメイヨシノ’ (染井吉野)

Prunus ×yedoensis 'Somei-yoshino'

跡見No.／17,41～43,45～47,72～74,78,144,146～148

現代の桜の主役

現代では「サクラ」といえばこの品種を指すほど、最も広く植栽されるサクラで、江戸時代末期に江戸周辺でエドヒガンとオオシマザクラの間に生じたものと考えられています。花着きが非常によく豪華で、成長が早いことなどから、急速に全国に広がったサクラです。現在各地で植えられているものは最初の1本から増やされたクローンであるといわれています。



‘サノザクラ’ (佐野桜)

Prunus 'Sanozakura'

跡見No.／132

佐野藤右衛門ゆかりの桜

昭和5年に佐野藤右衛門氏が京都の広沢池の周辺にあったヤマザクラの実生1万本から選抜した栽培品種です。花はそれほど大きくはなく、花弁はごく淡い紅色で12～15枚ですが、花着きがよく美しいサクラです。ヤマザクラの栽培品種として扱われることも多いのですが、葉縁の鋸歯がやや伸びるなど、オオシマザクラの影響がみられます。



エドヒガン ‘イトザクラ’
(糸桜)

Prunus spachiana 'Pendula'

跡見No.／49,118

風情優しい桜

野生種のエドヒガンのうち枝が下向する品種で、一般には「シダレザクラ (枝垂桜)」と呼ばれています。エドヒガンと同様、花は小型で、萼筒が著しく膨らんで壺形になるのが特徴です。古くから各地で異なる系統のものが栽培され、花色は変異があります。本学のNo.118は、京都の円山公園にある「祇園枝垂桜」と呼ばれる株の種子から育てたものといわれています。



エドヒガン ‘ヤエベニシダレ’
(八重紅枝垂)

Prunus spachiana 'Plena-rosea'

跡見No.／137

‘細雪’に登場

‘イトザクラ’のうち花色が濃く八重咲きとなったもので、非常に優美な印象を受けるサクラです。萼筒はやはり‘イトザクラ’と同様、壺形です。京都の平安神宮がこの品種の名所として有名で、谷崎潤一郎は著作「細雪」の中で「夕空にひろがっている紅の雲」と表現しています。また、川端康成の「古都」にも登場しており、人を魅了するサクラなのかも知れません。



ヤマザクラ ‘ヒヨシザクラ’
(日吉桜)

Prunus jamasakura 'Hiyoshizakura'

跡見No.／7,65

日吉神社に発祥

滋賀県大津市の日吉神社境内にある原木から佐野藤右衛門氏によって増殖された品種です。花は淡い紅紫色で小輪ですが、花と同時に展開する紅茶色の若葉との対比が美しく、品のあるサクラです。枝が上に向かって伸びるため、スリムな樹形になります。また、サクラの雌しべは1つの花に1本であるのが普通ですが、この品種は2本であることも特徴的です。